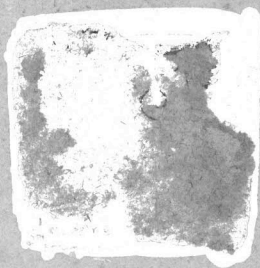
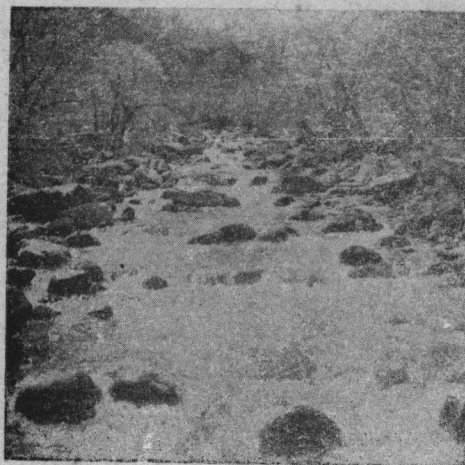
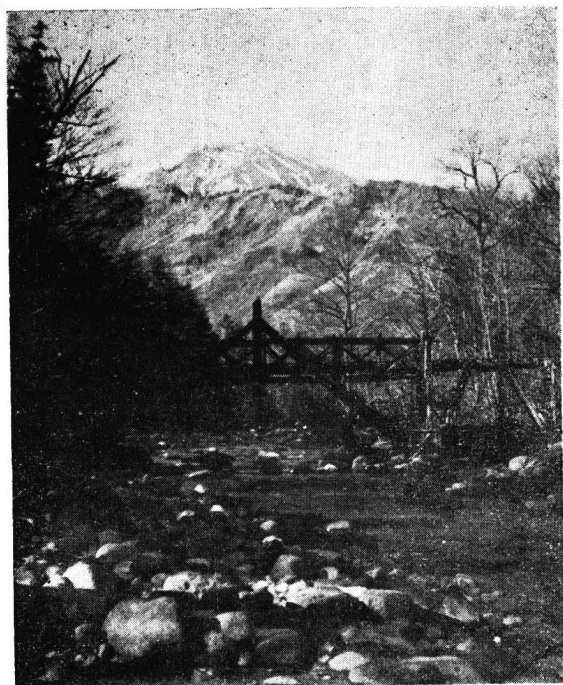


木曾王瀧川昆蟲誌

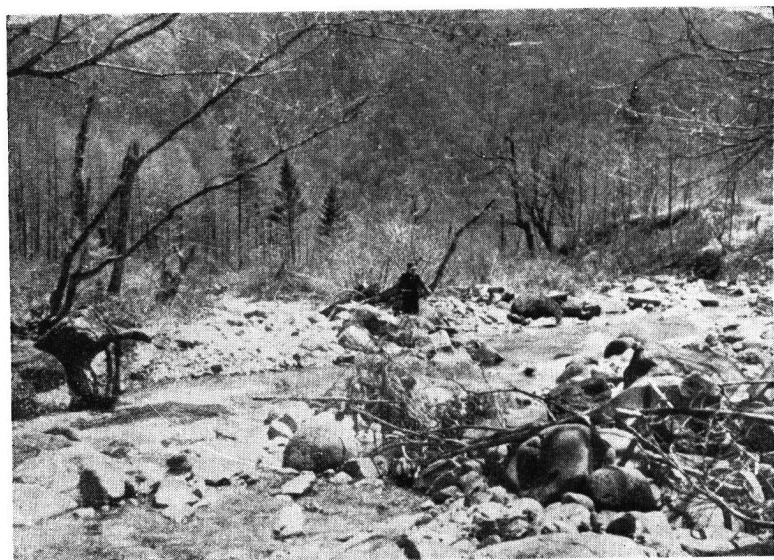
可兒藤吉



木曾教育會



白 川



上 黑 澤

木曾王瀧川昆蟲誌

溪流昆蟲の生態學的研究

可 兒 藤 吉
遺 稿

森 下 正 明
編 集

木 曾 教 育 會

1952年2月

序

本書は「王滝川昆蟲誌」と題してあるが、その内容は書名通りの単なる昆蟲誌ではなく、可児藤吉君の生態学研究の遺稿集である。書中王滝川の水棲昆蟲の研究が主部を占めているから、それをとつて書名としたのである。收められた論文九篇の成立の由来については、巻末に載せた森下博士の解説にくわしい。

可児君が木曾の山川に親しんだのは十年足らずの歳月に過ぎぬが、その間この地方の流水で君が足を入れなかつたのではないといつてよい位である特に王滝川は全く研究室の一部のようにしてその踏査研究に没頭し、その根拠とした木曾生物研究所を後にしてから帰来まで、十数日あるいは月余に及んだことが度々であつた。かくして生活環境としての流水とその動物とを一体とした研究が着々として進み、流水棲生物の生態学に一新境地を開くまでになつた。われわれは君の戦死によつてこの研究が完成しなかつたことを深く残念に思うものである。その遺された夥しいノートや草稿は、森下博士が敦い友情を以て拾集補綴する勞を執られたので、われわれは君の研究の成長を容易に知ることができることとなつた。そして、木曾教育会と西筑摩郡王滝村との學術に対する深い理解と好意とによつて、可児君が深く愛した信州の地で本書を公刊し得る運びとなつたことは、君の友人としてのわれわれの感銘に堪えぬところである。

本書出版の経過は上に述べた通りであるが、社団法人木曾教育会前会長川口五男人氏（現読書小学校長）の好意によつてその刊行計畫が決定し、同会現会長青木広助氏の深い理解によつて実を結んだのである。また本書のその郷土研究に対する価値を認めて、経済的援助を惜まれなかつた王滝村村長松原重良氏の支持がなくては、本書はかく速かに公刊の運びに到らなかつたであらう。また、出版につき諸般の斡旋につとめられた木曾生物研究所員横内齋氏、ならびに木曾教育会幹部諸氏にも少からぬお世話になつた。ここにこれらの諸氏の芳情に対して、心からなる感謝の意を表する。

昭和27年2月1日

上 野 益 三



可兒藤吉君 (1908—1944)

可兒君は明治41年1月1日、岡山県勝田郡勝間田町で、可兒藤十郎氏の次男として生まれた。大正11年4月、岡山県立津山中学校に入学、昭和2年4月、当時新設された大阪府立浪速高等学校理科乙類に進学、昭和5年4月、京都大学農学部農林生物学科に入学した。大学での専攻学科は昆虫学にとり、湯浅八郎教授の指導を受け、昭和8年3月、ノミの触角に関する比較形態学的研究論文を以て卒業。その後の大学院生活は、京都大学理学部に選び、動物学の川村多実二教授の指導を受け、ここで溪流の生態学的研究に没頭した。

可兒君の研究は、溪流に見られる昆虫の形態から入つていつたが、形態は生活の反映として見る時に、はじめてその意義を理解し得る故に、彼の努力は生物の現象を地理的環境や生物社会的環境を通じて理解しようとする方向へ進んだ。更に、生物は歴史的な存在である故に、進化史的に現象の意義をとらえなければならず、これが研究には自ら深く方法論についての反省を必要とするに至つた。彼の残して行つた蔵書の中に多くの哲学書或は論理学の書が発見され、また社会学の知識をかりて生物現象を解明する補助としようとした努力の跡が認められる。

彼は、一方豊かな芸術的センスを身につけ、特に絵画に秀でていたが、ものごとを表現するのにも独創性があり、決して形式にこだわるようなことがなかつた。従つて、彼の論文は彼自身がまとめなければ精彩を失うのであるが、いまとなつては如何ともなし難い。そのつつしみ深い彼の性格が或る点ではわざわざいとなり、生前に自らの手で多くの論文を発表するに至らなかつたことを、われわれは深く残念に思う。

昭和18年10月、太平洋戦争のために一兵卒として召集され、昭和19年4月、和歌山市附近より乗船し、南方に出征した。その後昭和19年7月18日、マリヤナ島方面で戦死したとの報知を受けた。

終戦後、可児君の人となりを愛し、その学識を深く尊敬していた者が集つて可児君の遺稿を整理し出版することを約したのが、昭和22年5月27日であるが、その後種々の事情があつて実現の時期がたちおくれたのは真に申訳なきことであつた。なお遺稿整理は主として森下が当り、一応脱稿したのが昭和28年9月であるが、出版事情の悪化その他の原因で停滞の状態にあつたところ、今回木曾教育会の厚意により、可児君の仕事に関してゆかりの土地である信州より、この著書が出版されるに至つたことは、遺稿整理委員一同の深く喜び感謝するところである。また、この期間中、われわれの仕事に深い理解と同情を示された可児君の兄さんである可児治雄氏、並に遺稿整理の一部に協力して下つた安江安宜氏、辻英夫氏等に謹んで感謝の意を表する。

昭和26年2月7日

可児藤吉遺稿整理委員

宮地 伝三郎 上野 益三 今西 錦司 牧野 四子吉
 岩田 久二雄 徳田 御稔 森下 正明 澁谷 寿夫
 内田 俊郎 (順序不同)

木曾王瀧川昆虫誌

— 可兒藤吉生態學論文集 —

目 次

序 (上野 益三)	前 I
可兒藤吉君 (1908~1944)	前 3
1. 賀茂川におけるブユの分布	1
2. 流水における動物の生活状態 一川の形態単位と動物相一	19
3. 王滝川三浦平附近の動物生態学的研究 I	37
4. 王滝川三浦平附近の動物生態学的研究 II	97
5. 堰堤工事施行中の河流の性状の変化とそれが水棲動物に 及ぼす影響の調査	129
6. 下水溝の生態	141
7. マユタテアカネ (<i>Sympetrum eroticum</i> SELYS) の交尾産卵寸描	162
8. 晩春の川にて 一ホシクロガガンボ一	176
9. 賀茂川の水溫同時観測の記録	183
あ と が き (森下正明)	212
あ と が き (青木広助)	216

脚註には編者の附したものと可兒氏自身の附したものとがあるが、これらは次のように区別してある。

* , ** , 可兒氏自身の附したもの ; 1), 2), 編者の附したもの